

आयूस: あーゆす

(発行) 京都文教大学図書館
京都文教短期大学図書館/京都府宇治市槇島町千足80

❖❖❖❖ 心の居場所としての図書館 ❖❖❖❖

京都文教短期大学図書館長

幼児教育学科・教授(教育学) 越後哲治

図書館というのは私たちにとって何だろう。「私たち」と表現したのは、図書館の存在意味は、人によって、また時代や状況と共に変わってくると思われるからである。

文学好きの人が、文学作品を図書館で借り出し、図書館で書物を読む場合、図書館は書庫であり、読書室であろう。学生がレポートを書くために、図書を借り出し、利用する場合は自習室であろう。ひそひそと友と何かの計画を立てるときは、相談室や企画室であろう。また、疲れた人が静かな環境で居眠りをするときは休憩室であろう。

近年では図書館には書物のほかに、ビデオ、CDやDVDなどの視聴覚資料も置かれている。以前、保育者養成を行っているある短大を訪問した時には、学生のために遊具コーナーもあった。またある都市の市立図書館で、夕刻にミニコンサートがあり、出かけていったことを思い出す。

このような状況を考えれば、人によって図書館の存在意味は異なって当然であり、図書館にはそうした期待に応えることが求められる。

私自身と図書館との関わりを振り返ってみると、やはり年齢とともに変わっている。少年時代には町の図書館もなく、殆ど利用していない。学生時代には、まだエアコンが家庭に普及していない時代で、エアコン設備のある図書館は有難い自習室であった。

かつて筆者は1年間ドイツのマールブルク大学で研修の機会を得た。この大学は、現存するプロテスタントの最古の大学として1527年に設立された大学で、多くの有名な学者が輩出していて、童話収集家のグリム兄弟が学んだ大学としても知られている。当時の学舎が今も使用されており、その地下1階が神学部図書館で、筆者はそこで多くの資料を借り出し、コピーすることができた。

またマールブルクには、ドイツ国内で最も古い純粋なゴシック建築の聖エリーザベト教会がある。彼女が幸福な結婚生活を送ったお城が、アイゼナハ郊外にあるヴァルトブルク城である。そこにはルターが聖書を母国語に翻訳した部屋も残っている。

短期間であるが、このドイツでの体験を振り返ると、昔の図書館は薄暗い地下にあり、書物を読むことも容易でなかったであろうことが察せられる。ルターが聖書を母国語訳した部屋は牢獄のような部屋であった。いずれも今日の図書館から想像できない光景である。

私自身の若い時を振り返っても、コピーが普及したのは大学卒業後であった。今日インターネットですぐさま資料や情報を手に入れられる便利な時代であるが、古の読書環境を想像すれば、先人の苦勞と努力が偲ばれる。

(えちご てつじ)

□□□□□ 本も出会いを待っている □□□□□

臨床心理学科・教授（臨床心理学） 名 取 琢 自

少し昔の話になるが、1980年代後半に「チャネリング」という言葉がメディアで紹介されたことがある。「チャネラー」と呼ばれる人が、依頼者の守護霊など、関係する霊的存在とコミュニケーションする「チャンネル」を開き、前世の因縁や宿業に関するメッセージを媒介して語ってくれるのだ。なかでも、ハリウッド女優シャーリー・マクレーンが不思議な導きの糸を辿って、チャネラーと出会い、現在の間人関係における難しさの意味を再確認していく過程を綴った自叙伝『アウト・オン・ア・リム』はベストセラーになり、本人主演で映像化もされて注目を浴びていた。本年度春学期の授業『家族関係問題』で取り上げた『愛と追憶の日々』の母親オーロラを演じた女優なので、印象に残っている人もいることだろう。

『アウト・オン・ア・リム』の前半では、シャーリーはチャネリングにも霊的世界にも懐疑的で、導き手となる人物とも面白半分に接している程度だった。ところが公演先の香港でふと立ち寄った書店の入口を入ったところで、突然、棚の上からバサッと一冊の本が落ちてきて、シャーリーの腕にすっぽりと入る。それは“A Dweller on Two Planets”という、チャネリングに関わりの深い内容の本だった。びっくりするシャーリーに、店員は「こんなことはよくあるわ」と平然としている。本のほうから飛び込んでくるこの出会いは、思いがけない偶然であるがゆえに、その意味を考え直さずにはおれない迫力がある。ハプニングが新しい扉の向こうへと、背中を一押ししてくれたのだ。いやこんなことは作り話だ、脚色だろう、と訝る方もいるだろうし、その可能性も否定できないが、これと似たような、思いがけない「意味」との偶然の出会いを経験された人もおられるのではないだろうか。

筆者は大学生の頃から夢記録をつけている。夢

に関心を持っていると、日常の経験のなかに、意味深い偶然の一致や符合がそう珍しくないことに気づかされる。自分の心理状態と現実での出来事との対応関係を検討できる材料があれば、ささやかな偶然の一致を確認するチャンスが増えるのだろう。

C.G.ユングはこういう偶然の一致から見えてくる秩序に注目し、時系列順の因果関係とは異なるが、やはり意味のある連関ではないかと考え、共時性(シンクロニシティ)と名付けた。時系列の因果関係も含め、個人のまわりにどのような意味のある出来事や存在が「布置」しているのかは、ユング派深層心理学が特に関心を寄せる視点である。ただ、共時的な出来事があればよいというような単純なことではなくて、思いがけない一致があまりにも多すぎるときは、本人の気づかないところで何かが活性化してしまっているわけだから、その意味について真剣に考え、取り組まねばならない事態なのかもしれない。

このエッセイの執筆中にも興味深い一致があった。朝のニュースで、“今年の松茸は豊作の見込み”という話題が紹介されていた。ニュースを見て、家族と松茸の値段と価値について、たわいもない会話をした後、ふと漱石の『永日小品』を開くと、最初に開いたページに松茸の話題が載っているではないか。それは『声』の一節で下宿生豊三郎が故郷の記憶を思い描く下りだった。「…日は高く屋の棟を照している。後の山を、こんもり隠す松の幹が悉く光って見える。茸(たけ)の時節である。豊三郎は机の上で今採ったばかりの茸の香を嗅いだ。そうして、豊、豊という母の声を聴いた。その声が非常に遠くにある。それで手に取るように明らかに聞える。一母は5年前に死んでしまった。」(夏目漱石『永日小品』、『文鳥・夢十夜』p.138-139 新潮文庫 1976)

松茸は別に好きでも嫌いでもないのだが、「昔はたくさん取れてそんなに高級品扱いされていなかったよ」という家族から聞いた思い出話や、松茸採りの名人から聞いた、松茸の生える場所は絶対に人には教えないんです、という話も記憶からよみがえってきた。「何も独占したいとかじゃないんですよ。不用意に触れるともう生えてくれなくなってしまうくらいデリケートなんです」という話だったのだが、ここから映画『楢山節考』のワンシーン、山に死に行く覚悟を決めた姑が、川魚が必ず捕まえられる秘密の場所を嫁に伝えるエピソードも思い出された。松茸をめぐるの連想は、豊かな自然を享受できた昔へのノスタルジー、傷つきやすい生育場所と心理臨床とのアナロジーなど、こころのなかを水面の波の様に広がっていった。

こんなこともあった。数年前、スイス・チューリヒの古本屋でふと足下を見ると、棚に古ぼけた装丁の本が三冊、紐でゆわえられて肩を寄せ合って収まっていた。なぜかその背表紙と装飾に惹かれて手に取ると、1920年代にドイツで翻訳されたラフカディオ・ハーンの随筆だった。ハーンのエッセイには明治期の日本人と精神文化が生き活きと綴られていて、日頃から愛読していた。日本では有名なハーンだが、海外での認知度はそう高くない印象がある。いつかはドイツ語版も手に入れたいとは思っていたのだが、まさかこんなに突然出会うとは驚きだった。少し迷ったが、幸い手の届く値段だったので、記念に購入した。ドイツ語学習を兼ねて、日本語訳と並べて眺めるのがさやかな楽しみになっている。

今年にも、スイスの古い修道院、アインジーデルンの図書室で、ふと見上げると、相当古い年代の日本旅行記がぱっと目に飛び込んできた。高い棚にあったことと、時間もなかったため、残念ながら閲覧はできなかったが、何千何万冊とある古書のなかから、こちらに注目してもらえるように本自体が光を放ったかのようであった。本のほうも、ふだんはじっと本棚で誰にも見向けずにいて孤独を味わいながら、手にとって開いてもらう瞬間を待っているのだろう。

最近では、脳が外からの刺激を情報処理する速度のほうが、意識がその意味に気づくよりも格段に早く、本人がそれと意識する前に脳が反応していることが知られている。見慣れた言語の文字を読むときも、一字一字を順番に追って意味を了解するだけでなく、同時に目に飛び込んでくる背景情報も処理されている。例えば、言葉のリストから目当ての単語を見つけ出すような課題では、本人が意識するよりも早く脳が反応しているという。

開架式図書館のすばらしいところは、こちらが意識としては目的としていない本との出会いに、文字通り開かれている点ではなからうか。しかも本学の図書館には、精神世界についても、各国の文化についても、広く、深く探究できそうな興味深い本が所狭しと集っている。

背表紙をなんとなく眺めながら、散歩みたいに歩いてみてはいかがだろう。ひょっとすると本の方からアプローチしてくれるかもしれない。

(なとり たくじ)



岡本嗣郎著

『終戦のエンペラー 陛下をお救いなさいまし』を読んで

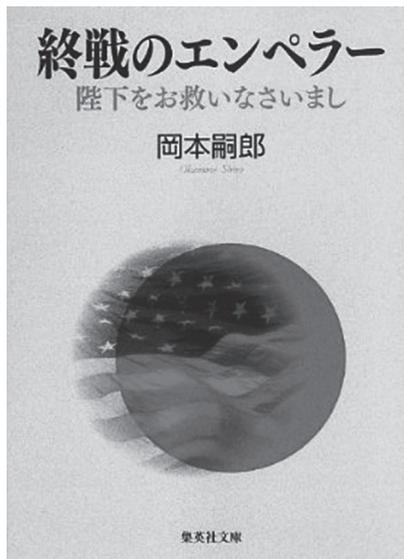


幼児教育学科・准教授(仏教学) 仲宗根 充 修

この作品は2013年夏日本公開のハリウッド映画『終戦のエンペラー』(監督ピーター・ウェーバー)の原作本で、昭和天皇の戦争責任を巡って訴追回避に尽力した陸軍准将ボナー・フェラーズ

と恵泉女学園大学創設者河井道に関するノンフィクションである。著者岡本嗣郎はこの作品を出版した翌年に死去、これが彼の遺作となった。

終戦直後の昭和20年8月30日、厚木飛行場に降



り立った連合軍最高司令官ダグラス・マッカーサー元帥は、日本の占領統治を成功させてアメリカ大統領選への出馬を画策、日本を防共の砦とするため

に、天皇の戦争責任を問うことなく、むしろ戦後日本の統治に利用することを考えていた。いっぽう、ソ連やオーストラリアなどは天皇を裁判に付することを強力に主張していた。

マッカーサーの腹心の部下であるフェラーズは、天皇の戦争責任とその処遇に関する意見書を作成し、マッカーサーに提出するという任務を与えられた。彼は陸軍内でも日本通として知られる人物で、かつて小泉八雲の著作を読破して日本を研究、陸軍指揮幕僚大学に『日本兵の心理』を卒業論文として提出した。

9月23日、フェラーズは、旧知の河井道をアメリカ大使館に招待、天皇の処遇に関して助言を求めた。彼女の助言はフェラーズの意見書作成に大きな影響力を持つことになる。

9月27日、アメリカ大使館において昭和天皇とマッカーサーとが会見。このとき、天皇が自らの戦争責任に言及した内容として、マッカーサーが後年著した『回想記』には、「私は、国民が戦争遂行にあたって政治、軍事両面で行ったすべての決定と行動に対する全責任を負う者として、私自身をあなたの代表する諸国の裁決にゆだねるためおたずねしました」とある。

いっぽう、作家児島襄が1975年『文藝春秋』に発表した奥村勝蔵（会見時の日本人通訳）の手記「マッカーサー元帥との御会見録」には、天皇の遺憾の意の表明は見られるものの、自らの戦争責

任への言及は見られない。

10月2日、フェラーズはマッカーサーに意見書を提出。その後も河井らの協力を得て、天皇無罪の証拠を求めて奔走するが、決定的な証拠は得られなかった。果たしてフェラーズの意見書が奏功し、天皇は極東国際軍事裁判（東京裁判）において訴追を免れたとされる。

河井道は、札幌にあるスミス女学校（サラ・スミス創設、現在の北星学園女子中学・高等学校）で日本初のクウェーカー教徒（友会徒）新渡戸稲造から教えを受け、彼の勧めにより、津田塾大学創設者津田梅子も学んだプリンマー女子大学へ留学した経験を持つ。日本の文化を愛し、天皇訴追回避に尽力したフェラーズ、河井、そして河井の恩師である新渡戸らがクウェーカー教徒であったことに奇妙な縁を感じる。

映画では、フェラーズ（マシュー・フォックス）は拘留所の東條英機（火野正平）に、昭和天皇（片岡孝太郎）の無罪を証言しうる人物を指名させた後、元首相近衛文麿（中村雅俊）、宮内次官関屋貞三郎（夏八木勲）、内大臣木戸幸一（伊武雅刀）から証言を得るべく奔走する。関屋貞三郎はこの映画のプロデューサー奈良橋陽子（ロックバンド・ゴダイゴのタケカワユキヒデの妻）の母方の祖父にあたる。残念ながら、関屋貞三郎役を演じた夏八木勲は、映画公開前に惜しまれながら他界した。

また、映画では、フェラーズと架空の女性シマダアヤ（初音映莉子）との美しくも儚いラブロマンスが挿入されるが、アヤのおじである鹿島大将（西田敏行）は、アメリカ日本大使館付武官として駐在経験を持つ軍人として描かれることなどから、海軍大将山本五十六をモデルにしているとされる。

原作本と映画とを比較しながら、歴史の重大局面にあたって鋭意奮闘する人びとの姿に迫ってみるのもおもしろい。

（なかそね みつのぶ）

『終戦のエンペラー 陛下をお救いなさいまし』
岡本嗣郎 著／集英社文庫

私のすすめる3冊

ライフデザイン学科・専任講師（トレーニング科学） 山下篤央

1. 『確かな人間関係のためのコミュニケーション論』

森川 知史 著／京都書房

経団連の「新卒採用に関するアンケート調査」の集計結果では、企業が求める人材の素質として“コミュニケーション能力”が上位に位置する。この言葉を見る度にいつも自問する。“コミュニケーションって何？”本意を理解したい。本書は、この言葉の本意をわかりやすく説明する。加えて、現在のコミュニケーションの在り方に疑問を投げかける。それは、社会における“私たち自身の存在”について考えさせられる。短大の生活は、短く、質のある2年間である。この本を学生生活中に読んで欲しい。社会と自身の繋がりを考える機会になると思う。

2. 『21世紀の健康読本 ウェルネスの発想で幸福な人生を』

水野 恵介 著／文芸社

“健康とは、身体的・精神的・社会的に完全に良好な状態であり、単に病気あるいは虚弱であることではない”これは、1948年に世界保健機構が健康について定義した内容である。つまり、身体的な状態、心の状態、社会と個人の関係、社会環境などを総合して“健康”と考える。本書は、個人の健康の維持・向上から健康を考え、更に、日本人の健康についての取り組みを紹介する。特に、「健康日本21」という健康寿命の延伸、健康格差の減少を目的とした国の施策を説明する。健康とは何か？を考えさせられる内容の本である。

3. 『赤と黒の軍旗が暴く、信長の秘密 色で読み解く日本の歴史』

木下代理子 著／ヴィレッジブックス新書

私は職業柄、頻繁に競技スポーツの大会会場に行く。気にかけて見るのがアスリートのユニフォームの色である。戦いに挑む意気込みを表すような色、身体が大きく見えるような色など、ここには記すことができないたくさん色を見る。色はまるで人の生き様を表しているようだ。本書は、日本の歴史上の人物に焦点をあて、その人物が好んで用いた色から“何を意図しているのか？”を色彩心理によって分析し、生き様を説明する。色とファッション・アパレルには深い関係がある。本書を読むと、安易に服を選ぶことができなくなる。

(やました あつお)

🌸🌸🌸🌸 選書ツアー 🌸🌸🌸🌸

幼児教育学科 I 回生 田村 瞳

きっかけは絵本を返却しに図書室へ行った時のことでした。選書ツアーの掲示がしてあったのを偶然見つけた私は、好きな本が好きなだけ買ってもらえるって、「なんじゃそりゃ」「行くしかないでしょ」とすぐ申し込みをしました。

当日は、先生からの説明通りかごを渡されて、あとは自由に自分が好きな本を詰めていくという流れなわけです。会場になっていたのはとても大きな本屋さんで、もうワクワクしないでいられるはずがありません。フロアごとに文庫本や雑誌が分けられており、エスカレーターで行ったり来たりしながら本を探しました。

そんな最中、たくさんの本がずらりと並ぶ棚の前で、ふと自分が小学生だった時のことを思い出しました。私は本を読むのが大好きで、よく図書室に足を運んでいました。多い年には1年間で100冊以上の本を借りて何かの賞をもらった記憶があります。しかし、中学生になってからは勉強や部活などが忙しく本を読むという機会がめっきり減ってしまいました。図書室を使ったのは授業で数回でしょうか。高校生の時は1年に数冊読むか読まないかという程度でした。このように私は知らず知らずのうち、本からすっかり離れた生活を送っていたのです。ですが、今感じているこの気持ちはなんでしょう。たくさんある本の中から私だけのお気に入りを探すこのわくわくした気持

ち。まるで小学生のころにもどったようなそんな感覚を思い出させてくれました。

気がつけば私のかごには、絵本から文庫本、写真集にハンドメイド小物の本までたくさんの本が入っていました。言ってしまうと趣味丸出しのごちゃごちゃとしたラインナップですが私には宝の山なのです。それは他の参加者の方々も同じようで、自分の好きな本でいっぱいになったかごを大切に「よいこらせ」と運んでおられました。

それから数日後、自分が選んだ本に一言ずつタグをつけるという作業があったので図書室へ向かいました。するとそこには私の選んだ本だけではなく、他の参加者の方の本もずらりと勢ぞろいしていたのです。それらを見ながらひそかにこの人の選んできた本面白いなーと思ったりしました。それぞれが自由に選んできたからこそ個性豊かにさまざまなジャンルの本が揃うというのも選書ツアーの魅力の一つなのかもしれませんね。

選書ツアーに参加して本当に貴重な体験をさせて頂くことができたと感じました。私は本が読みたいという気持ちを思い出すことができたので、これから少しずつでも暇をみては読書をしたいと思います。本好きな方もそうでない方も、一度参加してみたいかがでしよう。案外面白い発見ができるかもしれませんよ。

(たむら ひとみ)